

Market Flash

2019年 Top Risks



2019.01



日本アルプス電子株式会社
NIHON ALPS ELECTRONICS CO., LTD.



今年己亥（つちのと・い）。株式相場の格言では亥「固まる」の年です。昨年戌「笑う」は順調にいていたのですが、最後の最後で相場が急落し笑うことができませんでした。その流れを引き継いだ4日の大発会は、一時770円以上下落し、452円安の19561.96円で引けた。為替もお正月休みの間に一時104円まで円高が進む局面があるなど波乱の幕開けでした。

「固まる」という言葉から相場の急落などで身が固まるなどと想像しがちであり、大発会はまさにそのような状況でした。しかし、「固まる」という本来の相場の意味は、次のステップに向けての地固めをするという意味です。

今年元号が変わり、来年はいよいよ東京オリンピックです。何か新しい時代に向けて今年がその地固めをする年になることに期待したいと思います。

本年も何卒よろしくお願い申し上げます。

干支で占う2019年 亥年(いのしし年)

2019年は**己亥(つちのと・い)**

「**己亥**」は、「干支」の組み合わせの第36番目で、十干の「己」は6番目に当たる。中天の太陽、生命の循環中最も精力が横溢する時期を意味する。

十干の「**己(つちのと)**」は、土の弟という意味で、陰陽五行では陰の土にあたる。土とは今、自分が立っているまさにその地のことを指し、すべての中心的存在という意味を持つ。

また「己」という漢字は「おのれ」とも読む。これは3本の棒に糸を巻き付けて糸束を作る糸車の象形文字で、多くの糸束を生み出すことが転じて、自分自身を意味するようになった。

「己」にいとへんをつけると「紀」という文字になるが、「紀」は糸口や正しい筋道という意味に使われ、そこから「己」という文字も、決まり事や正しい行いといった意味を内包するようになった。

このように「**己**」は、**生命は横溢して真っ盛りを迎えた時期をさし、同時に正しい姿の自分という意味がある。**

「**亥**」は、陰陽五行「木・火・土・金・水」の分類では「**陰の水**」に当たる。

「子」は種子が土中で発芽の時期をまさに迎えた瞬間を意味し、「丑、寅、卯、辰、巳」と目が徐々に育ち、「午」で陰陽の転換点を迎え、「未、申、酉、戌」と結実する。そして最後の「**亥**」で**地面に落ちた種が土中へ埋まり、次世代の生命へと繋がっていく。**

すなわち、「**亥**」とは、**生命が収蔵された核を意味し、次へのタスキを渡す大切な準備期間を意味している。**

「己」と「亥」は、五行では「土剋水」という相剋の関係にある。相剋とは片方がもう片方を凌駕しようとすることで、土は水を濁らせ、溢れ出ようとする水の流れを土が止めることを意味している。

つまり、「**己亥**」は、ステップアップする大切な時期にもかかわらず、溢れんばかりの精力がそれを邪魔してしまうということで、**調子に乗り過ぎてしまうと落とし穴に落ちて、将来のチャンスを逃しかねないということ**を意味している。

他の東洋占術では、「**己亥**」は、迷わず信念をもって持続すれば吉運が舞い込むとされている。

つまり今年、「**己**」が持つ横溢するエネルギーが、「**亥**」が持つ飛躍のための大切な準備期間を邪魔しようとするが、**信念をもって持続すれば乗り切れるという年であることを意味している。**



亥の雑学

【いのしし年(亥年)生まれの特徴】

世の中にはさまざまな見解がありますが、いのしし年(亥年)生まれの人の特徴についてまとめると以下のような特徴になる。

辛抱強く根性があり、自我をしっかり持っているため、何事もしっかりとやり遂げるが、頑固で他人の忠告を聞かず自分の意見をはっきり述べる傾向がある。また、神経質で心配性、飽きっぽいといった一面もあるが、お人好しでさっぱりしているため、友人が多い。

【亥という字の成り立ち】

亥という字は獣(一説ではイノシシ)の象形文字で、骸(なきがら)、核(たね)の字のように、骨格の表れるような形のことをいう。

【イノシシの語源と特性】

猪は子作りが上手なので子孫繁栄、勇敢な動物とされている。「イノシシ」ということばの語源は、大和言葉の「イ」(猪のこと)の「シシ」(肉のこと)からきている。古くから猪は狩猟の対象とされてきたが、犬と同じぐらい鼻が敏感なうえ、神経質で警戒心が強い動物。非常に突進力が強いので、不用意に接近すると全力で突撃されることがある。

【猪の肉は「ぼたん」】

猪の肉を俗に「ぼたん」と呼ぶのは、取り合わせのよいもののためである「獅子に牡丹」に由来するという説と、赤い肉が白い脂肪で縁取られており、薄切りにして皿に盛った様子が牡丹の花に似ているからという説があります。日本では、獣肉を食べることが禁じられていた時代でも、「山鯨(やまくじら)」と称して食され、滋養強壯の食材であったため、「薬喰い」と呼ばれていた。

【猪と豚の関係】

猪が家畜化されて品種化されたものが豚です。日本では、縄文時代に猪の飼育が行われており、弥生時代に家畜化された豚が大陸から持ち込まれたと考えられている。現代中国語では「猪」ということばは豚を意味しており、猪は「野豚」と呼ばれている。また、中国では十二支の亥も猪ではなく豚を指す。日本でお馴染みのイノブタは、豚と猪の交配によって生まれた。

【猪が泥の中を「のたうちまわる」】

猪は体調管理をするために泥浴をする習性がある。猪が泥浴をする場所を「沼田場(ぬたば)」といい、猪が転がりながら体中に泥を塗る様子を表した「ぬたうちまわる」から、「のたうちまわる」ということばができた。

。



<いのししにまつわることわざ>

●猪突猛進(ちよとつもうしん)

猪は突進する習性があることから、目標に向かって猛烈な勢いで突き進むこと。周囲への配慮をせずがむしやりにやり抜くこと。

●猪武者(いのししむしゃ)

向こう見ずに突進する武士。状況を考えずがむしやりに事を行う人。

●猪勇(ちよゆう)

猪のように向こう見ずに突進する勇氣。また、そのような人。

●猪見て矢を引く

事が起こってから慌てて対策を講ずること。

●猪も七代目には豕(いのこ)になる

猪ですら七代続けば豕(豚のこと)になることから、長い年月をかければどのようなものでも変化をするということ。

●ししを食った報い

悪いことをした後には、受けなければならない報いがあるということ。

●馴染みでは猪の子も可愛い

どのようなものでも慣れ親しむと情が移ってかわいく思えるということ。

●山より大きな猪は出ぬ

山に生息する猪が山より大きいはずがないように、入れ物よりも大きな中身などあり得ないということ。また、大げさな言い方もほどほどにしろということ。

●猪首(いくび)

首が太くて短いこと。また、そのような首。

●猪口才(ちよこざい)

小生意気なことや、小生意気な人。

●御猪口(おちよこ)

日本酒を飲むときなどに用いる小さな器。



亥年の主な出来事

過去の亥年を振り返ってみると、かなり恐ろしい自然災害が起こっている。

1707年に富士山が大噴火(宝永大噴火)、1779年には桜島の大噴火(安永大噴火)、1923年(大正12年)は関東大震災(死者・行方不明10万5千人超)、1983年(昭和58年)には日本海中部地震(M7.7、10mを超える津波で104名が犠牲)、同年に三宅島の噴火もあった。そして、1995年(平成7年)の阪神淡路大震災である。

経済的にも1971年のニクソンショック、2007年はリーマンショックにつながるサブプライムローン問題が表面化している。

<過去の亥年の出来事>

2007年	ブルガリア、ルーマニアがヨーロッパ連合に加盟。EU加盟国は27ヶ国になる アンゴラ、石油輸出国機構(OPEC)に新規加盟 インターネット検索大手Google、携帯電話専用検索エンジン提供開始 ニコラ・サルコジ フランス大統領就任 アメリカ合衆国で初代iPhoneが発売開始 防衛庁が省に昇格し、防衛省発足。同時に久間章生防衛庁長官が初代防衛大臣に就任
1995年	オーストリア、フィンランド、スウェーデンがEUに加盟 世界貿易機関(WTO)発足 阪神・淡路大震災 地下鉄サリン事件 ベトナム、ASEANに正式加盟 マイクロソフトがWindows 95英語版を発売
1983年	千葉県浦安市に東京ディズニーランド開園 ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世が、地動説を支持したガリレオ・ガリレイに対する宗教裁判の誤りを認める アメリカ人初の女性宇宙飛行士を乗せたスペースシャトル「チャレンジャー」打ち上げ 任天堂が「ファミリーコンピュータ」(ファミコン)を発売 大韓航空機墜落事件。ソ連の領空を侵犯し、乗員・乗客269人全員死亡の惨事に 日本海中部地震が発生
1971年	世界経済フォーラム設立。総会をスイス・ダボスで開催、以後「ダボス会議」の名で呼ばれる アポロ14号が月に着陸 NASDAQによる証券取引はじまる 第48代横綱・大鵬が引退表明。一代年寄「大鵬」に就任 沖縄返還協定の調印式挙行 マクドナルド日本第1号店「銀座店」、三越銀座店脇にオープン 円変動相場制移行
1959年	キューバ革命 チベット蜂起 皇太子明仁親王(今上天皇)と正田美智子が結婚 IOC総会で、 1964年の夏季オリンピック開催地が東京に決まる シンガポールが独立 アラスカがアメリカ49番目の州となる ハワイがアメリカ50番目の州となる



「亥年」の株式市場

「子(ね)は繁盛、丑(うし)つまずき、寅(とら)千里を走り、卯(う)跳ねる、辰巳(たつみ)天井、午(うま)尻下がり、未(ひつじ)は辛抱、申酉(さるとり)騒ぐ、戌(いぬ)笑い、**亥(い)固まる**」といわれる。

冒頭で説明したように「固まる」というのは悪いイメージではなく、新しいステージに進むための準備期間であり、しっかりとエネルギーをためて備えるための年である。

年末年始に大荒れとなった相場によって、株価の転換点ともとれるチャートが出現している。これが上昇基調への転換点となることを期待する。

戦後の東証での売買が再開された1949年以降に「亥」は過去5回あり、勝率は**4勝1敗**と勝率8割である。5回平均の**騰落率は年プラス16.2%**で、これは**十二支中で4番目**である。

1959年: 日経平均の最初の亥年は1959年で、伊勢湾台風に見舞われたが、「岩戸景気」と呼ばれる高度経済成長のさなかにあった。日経平均の年末終値は874円88銭で、この年は31.3%の上昇率。当時の日本経済新聞紙上でも「一日一億七、八千万株という大商いが続き、また業者の決算内容も例年になく好調を示している」という記述が見られた。

1971年: 次の亥年は1971年。8月に当時のニクソン米大統領は金とドルの交換停止を発表し、発表翌日の日経平均は1日としては現在までで歴代10位の下落率(7.7%)を記録した。そして、日本経済への影響を懸念した動きが広がった。同じ年の12月に1ドル=360円の固定相場だった円相場は308円まで切り上がったが、金融緩和を背景に金融機関や事業会社の資金が年末にかけて市場に流れ、大納会終値は2713円74銭となり、70年末から36.6%の上昇率となった。

1983年: 続く亥年は東京ディズニーランドが開園し、任天堂が「ファミリーコンピュータ」を発売した1983年。年間を通じて一本調子で上昇し、大納会終値は高値引けとなる9893円82銭。82年末から23.4%上昇し、堅調だった80年代を象徴する年となった。企業業績への期待や世界的な株高基調により、外国人投資家が日本株を買っていた。この翌年、日経平均は初の1万円台乗せとなる。

1995年: 1995年は阪神大震災や地下鉄サリン事件など歴史に残る出来事が多い年だった。外国為替市場ではこの年の4月に円が一時、ドルに対し79円台をつける場面があるなど、急激に円高が進んだ。合わせて株価は軟調だったが、日米当局の協調介入で円高に歯止めがかかると、株価は一転、上昇基調になり、年間ではかろうじて上昇となった。この年の日経平均の推移をグラフで見ると、Vの字を描いている。年末終値は1万9868円15銭で、年間の上昇率は0.7%。

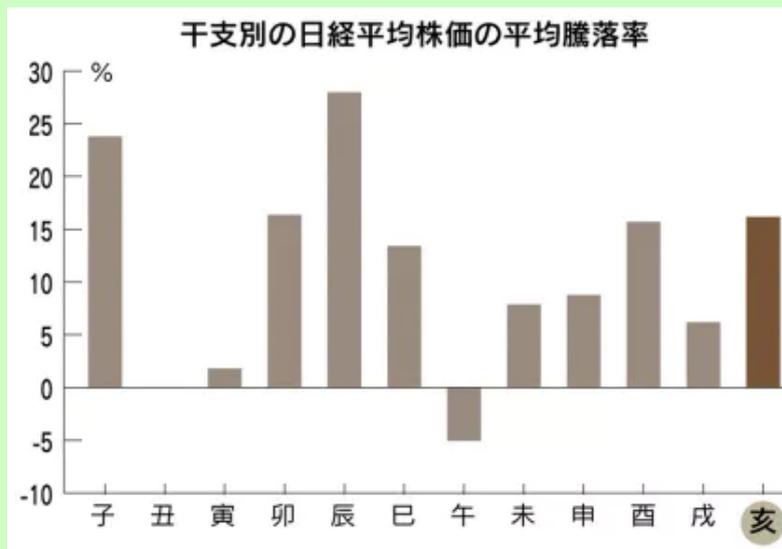
2007年: 2007年は唯一相場は下落した。このころになると米国だけでなく中国の株式相場が世界に影響を及ぼすようになっており、この年の2月には中国株下落による世界同時株安が起きた。米国でサブプライムローンの焦げ付きに端を発し、関連金融商品が金融機関の経営に及ぼす懸念が広がったのもこの年。不安は払拭せず、大納会の終値は1万5307円78銭。円高基調もあって年間の下落率は11.1%となった。世界的な金融不安は翌年の米リーマン・ブラザーズの経営破綻、09年3月の日経平均のバブル後最安値(7054円98銭)につながる。



干支別にみた日経平均株価の星取表

	1950年代	60	70	80	90	2000	10	成績	勝率 (%)
子	—	○	○	○	●	●	—	3勝2敗	60
丑	—	○	●	○	●	○	—	3勝2敗	60
寅	●	●	●	○	●	—	●	1勝5敗	17
卯	○	●	○	○	○	—	●	4勝2敗	67
辰	○	●	○	○	—	●	○	4勝2敗	67
巳	○	○	●	○	—	●	○	4勝2敗	67
午	●	○	○	—	●	●	○	3勝3敗	50
未	○	●	○	—	●	○	○	4勝2敗	67
申	○	○	—	○	●	○	○	5勝1敗	83
酉	●	○	—	○	○	○	○	5勝1敗	83
戌	○	—	●	○	○	○	●	4勝2敗	67
亥	○	—	○	○	○	●	?	4勝1敗	80

(注) 前年の終値とその年の終値を比較。○は上昇(勝ち)、●は下落(負け)を示す





アメリカの国際政治学者イアン・ブレマー博士が率いるユーラシア・グループという会社が毎年発表する「Top Risks」という報告書がある。

ブレマー氏が代表を務めるユーラシア・グループは、国際的な政治リスクについて研究するコンサルティング会社で、毎年初めにその年の世界の政治リスクトップ10を予想して発表している。

昨年はリスクの首位に中国の影響拡大を予想。慟哭が軍事力の増強やテクノロジーの覇権を目指し米国との間で軋轢が高まるリスクを的中させた。

「Top Risks 2019」

膨らむ地政学上の危険 米中関係 無法のサイバー空間 欧州のポピュリズム

- (1) 火種 (Bad seeds)
- (2) 米中関係 (US-China)
- (3) 無法地帯と化するサイバー空間 (Cyber gloves off)
- (4) 欧州で広がるポピュリズム (European populism)
- (5) 米国の内政 (The US at home)
- (6) イノベーションの冬 (Innovation winter)
- (7) 意思なき連合 (Coalition of the unwilling)
- (8) メキシコ
- (9) ウクライナ
- (10) ナイジェリア

1. 悪い種

2019年のトップにあげたのが、「地政学的な危険を誘発する「悪い種」というかなり広範囲で意味の深いものであった。トランプ大統領の出現以来欧米で起こっている政治の混乱やポピュリズムの台頭、主要国の同盟の弱体化を「悪い種 (Bad seeds)」と呼んで、「今後数年で世界の地政学的な危険が顕在化するだろう」と警告している。

Gゼロの影響で国際社会はリーダーシップを欠いている。欧州連合 (EU)、北大西洋条約機構 (NATO)、G20、G7、世界貿易機関 (WTO)、ロシア・中国・米国の関係悪化などあらゆるところで関係が悪化している。

2. 米中関係

これは言うまでもなくトランプ大統領が発動した関税政策で、すでに泥沼化している。米国は中国のIT分野での覇権を何としても阻止したいようだ。

3. 無法地帯と化するサイバー空間

毎年高まるサイバー攻撃リスク。ハッカーの手口はますます洗練され高度化されている。しかし、サイバー空間にはそれを解決するルールは確立されていない。米国、中国、ロシアからのサイバー攻撃は毎日膨大な回数に及んでいる。



4. 欧州で広がるポピュリズム

5月に行われる欧州議会選ではポピュリズムや反政府運動がかつてないほど勢いを増している。

5. 米国の内政

トランプ大統領の弾劾や辞任に追い込まれるリスクは少ないが、政治的な脆弱性は極めて高い。

6. イノベーションの冬

最先端の技術革新に必要な資金や人材は政治によって後退し、世界はイノベーションの冬に向かう、深刻な結果がもたらされる。

7. 意思なき連合

トランプ大統領は、米国はもはやリーダーの役割を担うべきではないとして「米国第一主義」を唱えている。しかしトランプ大統領を批判する人たちはこの戦略を「米国の孤立」と呼んでいる。ロシアやトルコ、北朝鮮、サウジアラビア、イスラエルの指導者はトランプ大統領を都合良く利用しようとしている。

8. メキシコ

「メキシコを再び偉大な国に」と唱えて大統領になったロペスオブラドール氏は同国を再び1960～70年大に逆戻りさせるリスクがある。

9. ウクライナ

10. ナイジェリア



2030年展望 ビジネスを揺るがすリスク

日経BP総研が昨年出した「2030年展望 ビジネスを揺るがす100のリスク」から10大リスクをご紹介します。このリスクは地政学リスク以外のビジネス上のリスクを予測したもので、前述のユーラシア・グループの地政学リスクと合わせて考えると面白い。

1. オープン化のリスク;世界は繋がり、何が起きるかわからない

ルール急変: 国家や企業がビジネスのルールや条件を恣意的に変える
典型がトランプ大統領の経済政策である。彼の一言でこれまでのルールが一変している。

2. ゲームチェンジング テクノロジーのリスク:競争条件を一変させる新技術

開発独裁優位: テクノロジー利用を遮二無二進めた国家が果実を得る
途上国が経済を発展させるために強権政治を断行することを開発独裁と呼んだ。これは40年以上前の話であるが、ゲームのルールを変えてしまうテクノロジーが登場した今、新時代の開発独裁というべき動きが目立ってきた。その典型が中国である。中国は「新しい石油」ともいうべき個人データを生かして、米中のイノベーション競争で一気に差をつけようとしている。中国はデータを国家が抑え一気に体制を整えようとしている。これはあらゆる分野で広がってきている。まさに独裁国家の権力で経済をし進めているのである。これは既成概念のある欧米日等よりはるかに優位になっている。

3. ESGのリスク:環境・社会・ガバナンスの新ルール

認証品争奪: 違法な伐採や操業に無縁の産物を取り合う
環境や社会に配慮していることを第三者が証明された原材料、すなわち「認証品」を使うことが求められる時代。

4. 人材不足のリスク:質量ともに足りない働き手

社員大流出: 人生百年や五輪などを契機に永年勤続に見切り

5. 自動運転のリスク:デジタル化・サービス化が産業を再定義

新車販売不振: 配車アプリと自動運転が供用を加速

6. 格差社会のリスク:中間層はもういない

中間層消滅: 平均的消費者などいなくなる
商品開発やサービス提供の際にターゲットに置くべき平均的な消費者像が想定しにくくなっている。言い換えると、消費者についてさまざまな「格差」が出てきている。

7. 都市スラム化のリスク:インフラ老朽化がお垂らすもの

火葬渋滞: 高齢化で他死社会、斎場や火葬場が大都市で不足



2030年展望 ビジネスを揺るがすリスク

8. コミュニケーション不全のリスク: ネット時代に存在感ゼロ

存在感ゼロ: ネットで検索しても企業名が上に出てこない

企業や組織のブランドは魅力の源泉であり、優秀な人材の採用、株主や協力者からの支持獲得、そして顧客や利用者の「ファン」化、すべてを支えている。しかし、近年、事業内容がわからない、イメージが薄い、とされる企業が多くなってきている。それも、広く多方面に事業展開しそれぞれで一定の成功を収めている企業でありながら認知度が低い。

9. AI(人工知能)利用のリスク: ITに伴う懸念

学習データ汚染: 誤りが混入しAIが誤学習

2010年代になってAIへの注目度は一気に高まってきた。AIの一分野である機械学習、中でもディープラーニング(深層学習)の台頭が目覚ましい。ディープラーニングの精度を高めるためには「良いデータ」を学習させることが不可欠であるが、「悪いデータ」を学習させてしまうととんでもない事態を引き起こすことになる。

2016年3月にマイクロソフトがチャットボット(対話をするソフトウェアロボット)を発売したが、十数時間のうちに人種差別・性差別の発言をするようになってしまい、翌日すぐに利用停止となってしまった。これは、利用者が「悪いデータ」を学習させてしまったからである。

10. リスクをチャンスにするために: 「アサンプションマネジメント」の勧め

リスクマネジメント形骸化: チャンスをつかめずリスク回避できず

情報社会の最大のリスクはどこから来るかわからない「サイバー攻撃」

これが日経BP総研が示した10大リスクである。(その他合計100のリスクを列挙している)

これら多くのリスクに共通している背景は、情報社会の急激な発展であろう。IoT、AIもそのひとつである。

そうした世の中の急激な変化の中で、私が最もリスクが大きいと考えるのは「サイバー攻撃」である。

今やどの産業においてもコンピューターの全く関わらないものはないといってもいいであろう。そうした中でこのサイバー攻撃の脅威は、最も大きなビジネスリスクの一つである。これはまさに「ビジネス・テロ」である。そして、その影響はビジネス上のものだけではなく、それを利用している一般の消費者にも大きな影響を及ぼす可能性が大きい。

日本政府は、サイバー攻撃を受けた場合に企業活動や国民生活への影響が大きい14分野を「重要インフラ」と位置づけ警戒を強めている。

情報通信、金融、航空、空港、鉄道、電力、ガス、政府・行政サービス、医療、水道、物流、化学、クレジット、石油である。

どこから攻撃されるかわからないこのサイバー攻撃は、企業が備えなければならない最も重要な課題となっている。

また、2016年には、IoT機器をサイバー攻撃の「踏み台」として利用するウイルス「Mirai」が世界中でまん延。パソコンだけでなくルーターやプリンター、防犯カメラなどの感染機器から大量のデータを送りつけてシステムをパンクさせる「DDoS攻撃」によって、米ツイッターや米アマゾン・ドット・コム 서비스가一時的につながらなくなるなどした。

今後我々の生活の中でもこうしたサイバー攻撃に対するリスクに備える必要がますます重要になってくるであろう。